

「教育の機械化」と生きがいの問題

佐々木 享

1

七月二七・二八の両日、忙しい日程をさしくって大阪まででかけ、万国博覧会を見学した。日頃、技術教育について勉強している者の一人として、博覧会というものがどのようなものであるかくらい知っておいたほうがいいと思つたし、もし、何らかのかたちで各国の文化とか技術というものを知ることができるといい、という淡い望みももっていた。七〇年の日本万博は、大国主義の宣伝ばかりで内容はつまらないものだ、という評価も耳にしていたし、反博運動とかいう万国博に反対しようという趣旨の文書が拙宅にも来ていたが、まったく否定してしまふよりも、少しばかりの期待があつたのである。

すでに学校は暑中休暇にはいつているから、日曜日は混雑してしようがないだろうと思つてウィークデーにしたの

だが、それでも二七日(月)には入場者が四五万人を越えたとかで(翌日の新聞で判明したことだが)帰りの電車は駅構内への入構制限をする程混んでいた。

会場にはいるとすぐ、人の多いのに驚きながら、三菱館の事務所を訪ね、どこをみたらいいかざつと話をきき、人気のあるソ連館やアメリカ館には夕方から行列に並ぶのが賢明ですよ、というような有益な(?) サジェスションを受けた。事務所の電話が、ダイヤルを廻す普通の受話器と違つて、押しボタン式になっており、相手が話し中だったりしたら、番号を記憶させておいてかけなおしができるとかいうような新式になっているのも、ちょっと興味がもてた。郊外に住んでいるため、十桁もの数字をまわして電話しようとする相手が話し中で、何回もかけ直すことにならざるにせられることが多いから、こんな電話が早く普及

して欲しいものだなどと感心もしたわけである。

しかし、そのあと一番さきに三菱未来館の建物（パビリオン）を観たのは、二日間の日程をみとおした腹づもりを決めるうえで有効であった。未来の都市だとか住宅だとかいうのをみせるわけだが、いずれもおよそ現実ばなれした空想マンガをみるような感じで、胸ふくらむ未来への期待とか希望というようなものは湧いてこないのである。出かけてくる前、万国博覧会の歴史——万国博を契機に、技術教育の新しい方法が披露され普及されたこともあった——の本などをみて、博覧会なるものについて描いてきたイメージや何がしかの期待は、金をかけてつくられた奇妙な遊園に過ぎない三菱未来館を観ることによって完全にこわされてしまった。遊園地ならどこのパビリオンにはいったところでおなじことだと腹もすわったので、そのつぎには、料金を払って入場しても決して失望感をいだくはずのなさそうな万国博美術館に行った。ここでは、予想通りの充実感を味わうことができたのだが、よそ道にはいり過ぎるから美術を語るのはやめておこう。

博覧会だという宣伝に誘われて巨大でしかもたごたした遊園地にはいり込んでしまったのだという腹がまえが決まってしまったあとは、気分はそれなりに楽になった。「うまいですよ」と教えられたニュージールランドのミルクセー

キをのみ、「観に行きます」と約束しておいた三井グループ館の見学をさっさとすませると、黒田孝郎教授が比較的开始ですよといっておられたことを憶い出してスカンジナビア館と欧州共同体館にはいった。まじめだといったところで、博覧会らしく具象物が並べられている——私には博覧会とはそういうものだという先入観があった——のではなく、映画——映像というべきか——を駆使して何ごとかを見せ、何ごとかを訴えようとしているに過ぎないことがわかった。ここまで観てくると、もうこのまま帰っても惜しくないという気分も出てきたが、せっかく来たのだからという俗物根性の方が強くて、もし博覧会らしいのであったらみつけものだらけのつもりで、できるだけ行列せずにはいれるとこを数多く観ることにした。それらを一一つ詳しく述べてもあまり意味はないが、右のあとに通ったのは、キューバ、ベルギー、ブルガリア、チェコスロバキア、ソ連、タンザニア、ガーナ、カナダ、アポロ、松下、日本の各パビリオンであった。

後日談になるが、官営（八幡）製鉄所の初代長官山内提雲のことを調べようと思つて、東大名誉教授山内恭彦氏（提雲は氏の祖父である）を訪ねたとき、万博というのは博覧会じゃなくて巨大な遊園地みたいなものですねといったら、「何とか博覧会というのは昔からそういうものです

よ」と軽くいなされてしまったところをみると、私の淡い期待がどうやら過大だったことを認めざるを得なかった。

しかし、万博の印象が右のようなものであり、しかもそれが万博の全体としての性格を言い当てているとしても、数は少ないが博覧会らしいパビリオンがあったこともまた認めなければならぬ。私の観たうちでは、ベルギー、ブルガリア、ソ連、松下の諸館の展示が、たんにおしぎせの映画をみせるだけでなく、さまざま具体物を並べて観る者の心をたのませてくれたのは大いに救いであった。そこには、押しつけでなく、観ようとする者の側にじゅうぶんな選択の余地がのこされているのである。とくに、一時間行列しても、入館してからその倍以上の時間を費やすに足るソ連館の内容は充実しているという感が深かった。万博全体の何分の一かしか観てこなかったわけだが、そのなかでこういうところを観ることができたのは、多分、かなり幸運なほうではなかったらうか。

ついでにいえば、私は、公害の原因になる排気ガスを出さない電気自動車(万博タクシー)に乗る機会にもでくわした。最高時速一五キロというのはいかにも現代ばなれしているが、この現代ばなれしたところにしかな蓄無害の自動車があり得ない事實は、改めて現代の技術のあり方に反省を加えさせるものがあるように思われたのである。

2

万国博覧会を見物した感慨を並べたりしたのは、今回の万国博覧会における観客への映像のうったえ方、おしつけ方には、多分に、今日のわが国の教育問題と等質の問題がふくまれているように思われたからである。

万国博の全体的な企図について論評するつもりはないが、たとえば、三菱館で、炎天下に長時間行列したあげくにせいぜい二、三〇分の間おしぎせの「未来」をみせられた数百万の人々は、いわゆる防衛産業五団体の役職のうち、日本航空工業会会長に牧田与一郎三菱重工業社長、日本兵器工業会会長に大久保謙三菱電機社長、日本ロケット開発協議会会長に岡野保次郎三菱重工業相談役が就任しており、さらに、財界において防衛生産の総合調整役をつとめている経団連防衛生産委員会の委員長にこの八月まで岡野氏が就任していたという事実、つまり三菱グループが日本におけるかくれもしない「死の商人」であることに思いを寄せることはまずなかっただろう。かくて万博は、三菱未来館を通して三菱が死の商人ではなく未来を語りかける企業だという何がしかの印象を人々に与えたということになるが、そうだとすれば、万博はたんに巨大な遊園地であっただけでなく巧妙なイデオロギー操作の場でもあったということになる。

ところで私は、今日のわが国の教育において最も重要な問題は、学校教育において子どもたちに教えるべき内容を、国家権力を背景に文部省が一方的に決め、国民と教師にそれを押しつけていることにある、と考えている。しかし、この事がらの重要性は、いろいろな複雑な理由のために、教師大衆や国民各階層にじゅうぶん理解されていないうらみがある。明治以来今日まで長期にわたって、わが国の教師の多くが、教育の内容はおかみが決めてくれるものだというやり方に、余りにも長い間馴れさせられてきたというところもあるだろう。しかし、教師が忍従の地位に陥られ、教育のしごとのうちの基本的な部分について創意性を發揮する余地を奪われてしまった結果は、教職者に対する低賃金という事実とあいまって、青年男女に対して教職というものに対する魅力を失わせることにもなっている。最近の文部行政の動向は、右のような傾向にさらに拍車をかけているようにみえる。たとえば、家永教授が提起した教科書訴訟について、国家権力が教育内容の決定に立ち入ることは違法であるという一審判決に対し、文部省は反省の態度を示すどころか真向から反対の意を表明している。また最近では、「生涯教育論」などということを言い出して、学校教育以外の分野にまで、国家権力による統制力を強めようとしているのである。このように国家権力による統制

を強化することは、そのなかで働く教師たちから、ますますそのしごとに対する魅力と情熱を奪ってしまうのではないかと心配をつのらせるばかりである。

国家統制が強まってくると、極端ないい方をすれば、現場教師は文部省が決めたことを子どもたちに一方的に伝えるパイプに過ぎなくなってくる。どう教えるかでなく、何を教えるかということについて、選択の自由が与えられていない教師は、自分の仕事のなかに、探求することの魅力を感じずるわけではない。それでは、教師は、万博のパビリオンにはいって、決まった時間内に決められたコースに従っておしぎせの映画を観せられる観客と同然である。かなり的人数が万博に行ったはずだが、その人たちが、万博が終わってから、万博で何を観たかについて殆ど語らないという傾向がみられる。多くのものを観せられたはずなのに、それは自分のほうから能動的に選び出して観たのではなかったし、それに、前にも述べたように万博全体としてはいわば遊園地みたいなものだったから、むりもないことであるが、教育のしごとがこの万博みたいなものでは困るのである。

万博の各会場で大いに駆使された映画やテレビの技術はまことに眼をみはるものがあった。映像を利用しなければ観ることのできないものがずいぶん多いし、同じものでも

動画で観るときの魅力もあるからである。しかし、映画やテレビは、観る者にとっては所詮は与えられるものではない。ところが、最近、人間は与えられるばかりと考えられていたテレビについても、自分の生き方に関連して選択をするのだというあたりまえのことが報告されて、話題を呼んでいる。『暮しの手帖』八号（一九七〇年秋季号）がNHKニュースは「テレビの困った番組・読者投票」の教養・報道部門で第一位を占めた、と報告しているのである。同誌によれば、NHKニュースは、娯楽・芸能・スポーツをふくめた全部門のなかでも、第四位を占め、第三位の「巨泉・前武ゲバゲバ三〇分」に近接した票を占めるほど「困った番組」と考えられている、というのである。そして、NHKニュースを「困った番組」だとした人たちが、その理由として、「政府や自民党の、御用放送の感じがする」「体制べったりすぎる」「右に偏向している」「事実をまげて報道している」「民間放送のニュースや、新聞が堂々とニュースに報道している事件について、すこしも触れないことがたびたびある」などをあげていること、つまり、報道のしかたでなく、内容で判断していることは重要である（一一二ページ）。恐らく取材には一番人数も金も費やし、機動力も機械装備もすぐれているはずのNHKのニュースが、内容の点からみて、いわゆる俗悪番組と並ん

で「困った番組」とされていることは教訓的である。

3

人間は、与えられた条件の枠内であてがいぶちを食べて生きるところに生きがいを感じたりはしない。もちろん、誰一人として勝手気ままに暮らすことのできる人間はなく、人間というものは所与の条件のなかでしか生きることにはできない。そのなかで、多かれ少なかれ自らの意志で積極的・能動的に行動し、困難にめげずに自らの意志と力量とで未来を切りひらこうとするときにこそ、生きがいを感じるのである。日々の生活が惰性に流されているようなところに、生きがいを感じたりはしないだろう。

子どもを育てあげる教育というしごととは、元来が創造的な性格をもっているから、それにたずさわる教師は、容易に自らのしごとと自体のなかに生きがいを見出すことができる筈であるように思われる。ところで、生きがいを感じるか否かは、ことばをかえれば、しごとや生活のなかに主体性をもっているか否かにかかわっている。教育というしごととのなかで最も重要な位置を占めている教育内容の選択に関して教師の自主性が認められないならば、教師は、かんじんなどころで主体性が奪われているというべきであり、したがってしごととのなかに生きがいを見出すことを困難にさせられているというべきであろう。

政府・文部省は、もちろん、こういう考え方には反対するだろう。教育のしごとには、一定の枠のなかで自由が認められているというだろう。そして、教育内容に関して選択の余地が大幅に残されている、というかもしれない。じつさい、さかんにいわれる「教育の機械化」とか「教育のシステム化」というのは、真実のところ教育方法の改善に関する問題に過ぎないのであるが、その宣伝のされ方なかでは、多分に、「教育の機械化」や「教育のシステム化」なるものが教育それ自体の革新につながるかのような言い方がなされている。私は別の機会にこの問題にふれたことがある（拙稿「八教育の機械化Vの意義と限界」『現代教育科学』一九七〇年十月号）から、ここでは深入りするのにはやめたい。しかし、「現代が求める教育のシステム化を図る」というテーマのもとに大がかりな宣伝をしながら開かれた千葉県北条小学校の公開研究会の事例について言及しておくことは必要である。（稲垣忠彦「八教育のシステム化V論の検討」『教育』一九七〇年七月号参照）

北条小学校の研究についての論評は稲垣氏の論稿に譲ることにして、ここでとりあげたい問題の一つは、同校の「システム化」において重要な位置を占めている「カリキュラム管理」のことである。

同校にはカリキュラム管理室という部屋がある。細長い

部屋に、多くの棚と六六〇のカリキュラム・ケースが設けられ、教科別のセクションに分けられ、それが年別のセクションにわけられ、さらに、月別にわけられている。「一年一組のA先生が、四月の国語科のある題材の学習にはいるとき、このカリキュラム管理室にいけば、北条小学校としての指導案も、それを実践するための資料も保存され、整理されており、すぐ活用できる、という部屋」であり、この部屋の機能によって「私たちの接する情報量の膨大さ、教育内容の増加、これらを整理し現場の先生方の力の散逸やむだを少なくし省力を考え集中化をはかっている」のだといわれる。ここでは、題材の選定とか、カリキュラムの編成をどういう観点から誰が行なうのかという問題は全く不問にされている。それどころか、教育内容についてあれこれ研究することはまるで教師の力を散逸するむだなものとして扱われている。システム化は、教師をたんなる教える機械にしてしまうものらしいのである。だから、こういう学校の授業では、稲垣氏がみたように（前掲誌、二八—三〇ページ）、あらかじめ用意された学習プランからはずれような子ども達の発想は全く無視されてしまう。ここにみる限りでは、「教育のシステム化」は、教師と子どもの主体性を奪ってしまうものらしいのである。

△専修大学助教授・ささき すずむ